

---

# カレーの王様

斉藤剛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カレーの王様

### 【Nコード】

N0755D

### 【作者名】

斉藤剛

### 【あらすじ】

カレーが大好きな男がいた。しかし男は突然カレーを食べることができなくなる。原因は不明だった。男はそれでもカレーを食べ続けた。そしてある物に辿りつく。

## （前書き）

哲学蒔蓄を含みます。

カレーを求めて止まない俺の体がカレーを拒否する

俺はカレーが大好きだ。

もう大好きなんてもんじゃねー、あれだ、本当に愛がこの世にあるのだとしたら

俺はカレーを愛してる。

愛してるぜえ！と公衆の面前で叫んでもいいほど、愛してる。

愛は無償だ。

見返りなど求めない。

そのために死んでもいいと、何の疑問を持たずに思える。

ああ、カレーを食べられないくらいなら俺は死んだほうがいい。

というか、あれだろ。実はみんなカレーが大好きでたまらないんだろ、本当は。

なのによ、好きな食い物とか聞かれると大概の奴がへんてこなものを答えるんだよな。

家庭主義のやろーは家族の手料理だの、肉じゃがだの答えやがって、  
しゃれてるかっこつけやろーはフランス料理とか答えやがって、  
ついでに関西人なんて決まって好み焼きとかたこ焼きなどと答えやがる。

あ、ロールキャベツだ？江戸っ子なら鰯だろだと？

あんなもんあれだろ世間体だの、かっこよさだの、駆け引きだのそんなもんを考えて

そう答えてるんだろ。

あほくせえ、言っちゃまえよ、カレーが大好きだ！とよ。

っーかあれだよな学校の給食とかよー、会社の社食とかもよ、もつとカレーを増やせて話だよな。

間違いなく心の中で喝采あげるやつ続出だぜ。

久方の友人と会う時の食事はカレーにしろ、会社の会合もカレーだ、合コンなんて

もってのほかカレーだ。

まあ、だからといって俺も常にカレーを食べているわけでもない。週に10食食べるか食べないかくらいだ。

そんな俺がカレーを食べることができなくなった。

前兆も次回予告も予兆もなかった。

突然カレーを食べれなくなった。

物理的には可能だ。カレーを掬って口にいれればいい。

だがその途端俺の体は完全な拒絶反応を示してしまう。

カレーを食べると間違はなく吐く。

どんなカレーでもだ。カレーの定義などどうでもいいが、俺がカレーと認識するもの全てでその症状が起きた。

俺は狂った。

いや狂ったと認識できる間はまだ狂ってはいないのだろうが。

荒れに荒れ、街をうろついてはカレーを求めては、食べては吐き食べては吐いた。

怒りと自分のやるせなさを感じてカレーを店員にぶん投げたこともあった。

医者にも行った。

自分でどうにもできないなら、医者にだって頼る。

「カレーを食べれるようにしてくれ」

「いや、君、それはまるで何を言ってるかわからないよ」

「すぐだ、すぐに直してくれ。狂ってしまいそうだ」

「まあ、一過性のものでしょう。健康な食生活をすればなおるでしょう」

俺はくそつたれの台詞をはく医者のやろーをぶん殴った。

もうすべてがどうでもよかった。

そして思い知る。

俺は絶望なんて知らなかった。しかし今知った。

これが絶望だ。望みを絶たれた状態だ。

もはや全てがどうでもいい。全てのものが灰色だ。喜びも悲しみもない。

もし今、宝くじで3億円が当たったとしても俺は何も感じないだろう。

もしくは、今俺の目の前で家族が惨殺されても俺はああくらいしか思わないだろう。

ああ、俺はカレーを食べられないのなら生きていけない。

そして今の俺はカレーを食べられない。

簡単な3段論法演繹法だ。

ジョセフィーヌはシグルウト伯爵を愛している。

シグルウト伯爵は女に愛されると発狂してしまう。

故にシグルウト伯爵は発狂する。

そして俺は生きていけない。

街のかたすみで、汚い路地裏で壁にもたれかかりながらそんなことを考えていた。

狂ったのは俺の精神か、それとも俺の体か。

体は精神の容れ物なんだろう、オカルトなデカルトが言っていた。なら、返しやがれおれの容れ物をよ。

その容れ物も最近では俺の思い通りに動きやしねえ。

ろくに食べてないのだから当たり前なのかもわからねえが。

でもな、まだまだ、まだ頭は動く。

それに今の俺だったら神にだって祈れる。

俺はさまよえるラム肉にはみえねーのか、神よ。

救えよ、救ってくれよ。最後の晩餐はカレーがいい。

だから救ってくれよ。

頭がぼやける。

カレーのことを考えている時だけは自分が存在している感じた。

俺がカレーを思うから俺はここにいるんだろうか。  
コギトエルゴカレーだな。

体はぼろぼろで頭は黄色い空間を浮遊していると、声が聞こえた。

「ワタシ、ワタシ、カレー、カレー、サガスツル」

エウレーカ！エウレーカ！

俺の頭の中で裸のおっさんが走り出した。

俺には聞こえた、間違いなくカレーと聞こえた。

意味はわからない、だが、俺はここだと思った。

道が開けるとしたらここしかねえと。

声の主は日本人には見えない女だった。

女はサラリーマン風の男になにやらしきりに話しかけていた。

「ワタシ、カレー、カレー、ココイル」

サラリーマン風の男はめんどくさそうに話を聞いているがまるで通じてなさそうだった。

俺は汚れた格好のままそいつらの前に躍り出て、女の両肩を掴んで言った。

「おめーもか、おめーもカレーを探してるのか！」

女は一瞬びつくりした後、力強い眼差しで俺を見て言った。

「カレー、カレー、サガスperl」

サラリーマン風の男は厄介ごとから逃げるようにささくさとその場を去っていった。

「ああ、その通りだ。カレーを探すしかないんだよな。てめーのいうとおりだ」

こいつが探してるカレーなら俺は食えるかもしれない。  
俺はなぜかくさった脳みそでそう思い始めていた。

「d f d s j k a s j d k f e e o e p x p v p d v e o  
m b k」

女がわけのわからない言葉で何かを言った。

「ああ？何いってんだかわかんねーよ。だが安心しろ、間違いなく

おめーの求めてる

カレーを探してみせる。見る！自由意志が行きやがるぜ！」

その後は俺は女を様々なカレー屋につれていき、カレーを食べさせた。

インドカレー、日本カレー、伝統のカレー、スープカレー、タイカレー、

新種のカレー、チェーン店のカレー、学食のカレー。

俺は全ての知識をフル動因して事にあたった。

知は、知はカレーだ。そうだろミスターベーコン。

無論俺は吐き続けていた。

俺は知っている、俺は自分が求めているカレーがなんなのかを知らないということを知っている。だから大丈夫だ。ソクラテスが知ってたことくらい俺

も知っている。

一番大切なのは単に生きる事ではなく、カレーを食べながら生きることなんだから。

カレーを食べられねえ体など無視すればいい。

女は相変わらずわけわからないことを言いながら、時には変な写真を見せてきたり

しながら、だがカレーを食べていた。

こいつの意思もそうとうなものだ。

言葉がわからなかつた俺にはわかる。

こいつは切実にカレーを求めている。

そんな風にして一週間がすぎた。

無論金などなかったから、俺はかっぱらいや恐喝をしながらカレーを食べ続けた。女もカレーを食べ続ける。

だが食べ終えると女はすぐまた

「カレー カレ」



と言出す。

こいつが求めてるカレーは見つかる気配すらなかった。  
俺の体はもうすでにぼろぼろだった。

「神は、カレーの神も死んだのかよ、ニーチェよ」

だんだん視界もせまくなってきた。

胃は既に体の中でちぎれ果ててるように感じる。

「最大多数の最大カレーが…」

俺にはもうわからなかった。

俺が求めてるカレーは何なのだ。

こいつの求めてるカレーは何なのだ。

俺が知りうる限り全てのカレーをこいつに食べさせた。

だが、こいつは一度も笑いはしない。

だめか、だめなのか。

俺達は警察に追われながら住宅街に逃げ込んでいた。

だんだん女も俺をいぶかしみだし、俺を殺しそうな目で睨んでくる。

「まあ待てよ、まだだ。この世界のカレーはこんなもんじゃねー。」

ぜってー、てめーの探しているカレーはあるはずなんだ」

俺はへたりこみながらそう答える。

そうは言っても実は俺にはもうあてがなかった。

もう既に俺が知りうる限りの全ての種類の店に行ってしまった。

「くそ、くそがよー」

そんな時に突然匂いがした。

間違えるわけがない。

この俺が間違えるわけがない。それはカレーの匂いだった。

おそらくどこかの家で作っているカレーの匂いだろう。

「そうか、そうだ。なぜここに辿りつかなかった。

カレーは店だけじゃねえ」

「カレー カレー ココアル」

「ああ、もうひるみやしねえよ。突っ込むぞ！」

俺はカレーの匂いを辿りながら目標の家を探した。

なぜか女もなにかを感じとっているらしかった。

間違いない、ここだ、これが最後の探索になると確信していた。もう、他人の家に突然乗り込むことに対しては何の躊躇もなかった。目標の家を見つけるとドアを蹴破った。

ドアをずんずんと進んで行き、キッチンを発見した。

そこではエプロンをつけた女が怯えるようにしてつたつていた。そしてその奥のガスコンロには大きめの鍋がのっていた。

あれだ、まちがいねえ。求めているものはあそこにある。

「無礼は完全に承知だ。頭がおかしいと思われるのも無理はねえ。

だが、そんなことはどうでもいいからあのカレーを食わせてくれ」  
こんな言葉が意味ないことはわかっていた。

こちらら狂人だ。

エプロン女は恐怖でその場にへたれこんでしまったようだ。

ああ、それならいい。邪魔さえしてくれなきゃカレーだけいただいでおとなしく帰るよ。

俺は手近にあった容器に飯とカレーをいれ女に放った。

自分の分もよそうと近くにあった2人用くらいの小さなテーブルに置き、椅子に座る。

女も向かい合わせに椅子に座った。

カレーを見ながら言う。

「いただきます」

「イタダキマス」

女は俺と一緒にいる間にこの言葉だけは覚えていた。

俺はカレーをスプーンで掬ってそれを見ながら思う。

人間は考える匙である。

ああ、まちがいねえよ、あんたはうまいことを言ったもんだ、あら  
いぐまパスカルよ。

俺はカレーを口に入れた。

頭の中で何かが爆発した。

しびれるような感覚の中、俺は溶けていく様だった。

一瞬全てが光につつまれ、感覚が浮遊する。

後ろの方で男の声やら女の声やらが聞こえた気がした。

しかしもうそんなものはどうでもよかった。

そうか、そういうことだったのか。結局そういうことかよ。

人は還るのではなく還らされるのだ。

誰かの言葉が頭の中で跳ね返る。

俺が求めていたカレーはこういう種類のものだった。

親が子供のために作るカレー、彼女が彼氏のために作るカレー

親愛なる者へ作られるカレー。

そういうたぐいのものだったのだ。

このカレーを食べてわかった。だからわかったのはこれは違うということだ。

このカレーは俺のために作られたものではない。だからこれは違う。でも俺が求めているカレーはこの種類のカレーだと気付かされた。

ここに至って無知の知は完全に崩壊した。

そして、俺は自分の求めるカレーを俺は手に入れることができないだろうことも知った。

ああ、俺はその全てを失ってしまったている。

これから手に入れることもできないだろう。

求めよされば与えられん。

無理だ、俺には永久に手に入らない。

この世には2種類の人間がいるんだったかなあセルバンテス先生よ。持てる者と持たざる者だったな。

俺は気付くと涙を流していた。

そしてふと前を見ると女も涙を流しているのが見えた。

「ああ、おめーもか。おめーも気付いたか。そうだそういうことだったんだな」

女は涙を流しながら立ち上がって俺の後方を見ているようだった。

ああ、俺も満足だよ、もういいよな。

頭がグワーンとなる。

視界が黄色く染まり、平衡感覚が消える。

ドタツという音が聞こえる。

なんだ、スプーンがもてねえ。

頬に感じる冷たい感覚はなんだ。

やはり俺にはこのカレーを食べる資格はねえってことか。

なんか男と女が言い争っているような声が聞こえる。

ああ、静かにしてくれ。

ちよつと俺はショックと感動でわけわからなくなっているんだからよ。

だがそんな音もだんだん遠ざかる。

意識が搾りかすのようになっていく。

「シングルウト、やっと、やっと会えた」

「ジョセフィーヌ、なんで、なんで君がここにいるんだ。何事なんだこれは。」

おい、真理！大丈夫か。真理に何をしたんだ」

「知らないわ、そんな女。私はただあなたに会いたかったの。だから来たのここまで。」

本当に、本当に会いたかった」

「ジョセフィーヌ……」

「もう、離れないわ。昔みたいに一緒にいるの。あなたとずっと一緒に」

「ちよつと待ってくれジョセフィーヌ。状況がよくわからない。その倒れている男は」

なんなんだ」

「知らないわ。ただあなたに会う為に手伝ってもらったの。いろんなもの食べさせられたけど」

「君は、君は……。何だって君までこんなところにきてしまったんだ。しかも今更……」

「会えなかった時期のことなんてどうでもいいわ。さあ始めましょ

「新たな生を」

「だめだよ、だめだ。なんでだ、なんでこうなるんだ。いられないよ。もう君とは一緒に

いられないよジョセフィーヌ」

「何。何を言ってるの、シグルウト」

わけのわからない言葉が聞こえる。

あの女がよくしゃべってたわけのわからない言葉みたいな音が。その男バージョンまで聞こえる。

ああ、どうやらだめらしい。

拒否感が体中を駆け巡る。

今はつきりとわかるカレーは俺を拒否している。

俺がカレーを拒否しているのではなくてカレーが俺を拒否しているんだ。

でも安心しろ。大丈夫だ。

何せ俺はカレーを愛してるんだからな。

愛は無償だ。見返りなんて求めちゃいねえ。

そしてそのために滅ぶんなら本望だ。

あの女は探し求めていたカレーを見つけたのか？

そして見つけてどうした。

どうなったんだ。

俺の完全にはやけた視界にあの女と男が重なっているのが見えた。

男の腹の部分から何かが飛び出ているように見える。棒状の何かが。

その棒の先を女が握っている。俯きながら。

なんだ、カレーも食わずに何やってるんだ、あの女は。

おい、なんか滴っているぞ、それはお前の大事なカレーの雫じゃないのか。

いいのかよ。

まあ俺には関係ないが。

何かバタツと倒れたような音を俺は聞いた気がした。  
ゲーテよ、お前は光を望んだんだっけな。  
俺ならこう言っぜ。

「もっと、もっとカレーを…」

(後書き)

カレーが好きです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0755d/>

---

カレーの王様

2011年1月19日05時28分発行